



リベラル 再生の 基軸

のうりき
脳力のレッスン IV
寺島実郎

Terashima, Jitsuro

岩波書店

寺島美郎

Terashima, Jitsuro

リベラル 再生の 基軸

のうりき
脳力のレッスン IV

岩波書店

寺島実郎

1947 年、北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科修士課程修了、三井物産株式会社入社、調査部、業務部を経てブルッキングス研究所(在ワシントン DC)に出向。その後、米国三井物産ワシントン事務所長、三井物産常務執行役員等を経て、現在、一般財団法人日本総合研究所理事長、多摩大学学長、株式会社三井物産戦略研究所会長。

著書に『新経済主義宣言』(新潮社)、『国家の論理と企業の論理』(中央公論社)、『正義の経済学』ふたたび』(日本経済新聞社)、『脅威のアメリカ 希望のアメリカ』(岩波書店)、『われら戦後世代の「坂の上の雲」』(PHP 新書)、『二十世紀から何を学ぶか』上・下(新潮選書)、『脳力のレッスン』Ⅰ・Ⅱ(岩波書店)、『世界を知る力』(PHP 新書)、『問いかけとしての戦後日本と日米同盟 脳力のレッスンⅢ』(岩波書店)、『世界を知る力 日本創生編』(PHP 新書)、『大中華圏』(NHK 出版)、『何のために働くのか』(文春新書)など。

リベラル再生の基軸 脳力のレッスンⅣ

2014 年 1 月 17 日 第 1 刷発行

著者 でらしまじつろう
寺島実郎

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・三水舎

© Jitsuro Terashima 2014
ISBN 978-4-00-025568-4 Printed in Japan
JASRAC 出 1315981-301

Ⓡ〔日本複製権センター委託出版物〕本書を無断で複製複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書をコピーされる場合は、事前に日本複製権センター(JRRC)の許諾を受けてください。

JRRC Tel 03-3401-2382 <http://www.jrcc.or.jp/> E-mail jrcc_info@jrcc.or.jp

リベラル
再生の
基軸
脳力のレッスンⅣ

はじめに

その出来事が自分の全存在を試してことがある。渡辺崋山の言に「大功は緩にあり、機会は急にあり」がある。常態においては全く見えなかった構造が、ある出来事を機に本質を露呈し、様々な事象の関連性が見えてくることもある。その瞬間に、日常積み上げてきた思索と生き方を凝縮し、全身全霊をもって向き合わねばなくなる。

二〇〇一年の九月一日のニューヨーク、ワシントンを襲った同時テロがそうであり、二〇〇一年三月十一日の東日本大震災がそうであった。考えてみれば、岩波の『世界』誌で連載してきた「脳力のレッスン」も一四〇回を越し、それはこの一二年間における二つの歴史的出来事を超える期間での連載執筆の機会を与えられたことを意味する。「論壇」という言葉は最早死語といえるほど発言・発信する人は多様化しているが、こういう大きな事態に直面した瞬間に議論していることの基軸と厚みが明らかにになる。多くは当惑し、事態の本質が見えなくなり、表層の解説と印象の吐露に右往左往しはじめるからである。

単行本『脳力のレッスン——正気の時代のために』(二〇〇四年二月刊)は、9・11の衝撃に向き合い、必死になって「逆上してイラク戦争に向かうアメリカ」に対する日本の在り方を模索す

る論考の集積であり、『脳力のレッスンⅡ——脱9・11への視座』(二〇〇七年二月刊)は「イラクの失敗」が顕在化する中で、日本における小泉改革といわれた時代を同時進行的に考察したものであった。また、『問いかけとしての戦後日本と日米同盟 脳力のレッスンⅢ』(二〇一〇年一月刊)は、一段と問題意識を絞り込み、冷戦型世界観の呪縛から脱するために「戦後日本なるものと日米関係」の再考察を試みるものであった。

今回の『脳力のレッスンⅣ』は、「東日本大震災——フクシマ原発事故」という衝撃を受けて、事態を直視する中で改めて自分の立ち位置を再確認せざるをえない苦悩の論考であり、同時に、不安の時代を背景に進行する「一億総保守化」(「絆」を希求する寂寥感)の中の国家主義・国権主義への回帰)とでもいうべき状況への危機意識に立ち、「リベラル再生」への視座を求める格闘でもあった。二〇〇九年における保守長期政権からの政権交代への期待は、民主党なる政党の「疑似保守政党化」による妥協と変節によって裏切られ、本来あいまいだった「リベラル」は一段と空疎な響きの単語と化しつつある。しかし、そんなことで立ち尽くしてはならない。戦後なる時代を総括し、あるべき社会を見つめて、しっかりとした「リベラル再生」の基軸を再構築する時である。そのための試論を二〇一三年春から秋への『世界』誌への連載で、思いを込めて五本積み上げてみた。それがこの本の主柱である。

この国が簡単に「国家主義への誘惑」に吸い込まれ、容易に「近隣アジアとの次元の低い確執」に追いつまされる理由は何なのだろうか。それは日本が真剣に近代なるものを熟成させてい

いからである。私の「リベラル再生」への視座を集約するならば、それは「近代を正視すること」につきる。つまり、近代なるものの総体と向き合わずしてリベラル再生はないということである。日本は近代という魔物に本気で向き合ってこなかった。そのため守るべきリベラルの本質的価値も分らないまま、歪曲され単純化された「保守」(「アメリカを引き込んで、国家の統合力を強め、近隣アジアに侮られない国を作る」)に回帰するのである。科学技術とデモクラシーをもたらした「近代」に対して、幕末維新の日本は、科学技術の成果だけを吸収し、デモクラシーには懐疑的で、「和魂洋才」という認識に救いを求めた。そして、デモクラシーの何かも理解できないまま「欧米近代の限界」と「近代の超克」を語りはじめ、その論理は軍国主義日本に都合よく利用されてしまった。

戦後、与えられたマッカーサー民主主義と技術導入による経済成長を存分に享受しながら、日本人にはどこか受け身で生きる姿勢がこびりつき、困難な状況が見えると「行き過ぎた平等主義」を嘆き、「経済至上主義と技術万能主義」を否定することに駆け込む。だからと言って、自らの自由で快適な生活を捨てて近代化の恩恵の外に出る覚悟も気迫もない。簡単に「アベノミクスの誘惑」(株が上がってめでたい)と「国家主義の囁き」(中国・韓国になめられてたまるか)に幻惑されてしまうのだ。

まことに、嘔吐を覚えるような時代である。イラク戦争を支持し、自衛隊のイラク派兵に賛成していた人物が、「イラクの失敗」を省察することなく平気で「米国との集团的自衛権行使に

踏み切るべし」と発言している。また、「保守」とは本来、軽薄な進歩至上主義や競争主義的改
革幻想を拒否する重心の低い構えを大切にするものだが、奇妙なことに現在我々が向き合う「一
億総保守」は安手のナショナリズムに浅薄な新自由主義が相乗りする状況にしか見えない。

メディアも悲しみを深め、ついこの間まで「橋下徹に日本の変革を委ねよ」と特集を組む総合
雑誌もあったし、「日中百年戦争に備えよ」と扇情的な見出しを掲げ、短絡で薄っぺらな世界認
識をまき散らす総合雑誌もある。こんなことで日本の知を失わせてはならない。

こうした時代と並走し、発言することは息苦しいことである。だが、時代の構造転換期ともい
える今、私は単なる「時代の解説者」などではいられない。時代のあるべき姿を求めて、知的緊
張感をもって時代と向き合っていかなばならない。一〇年ほど前になるが、八四歳の加藤周一が
私との対談の中で眼光鋭く言い放った「目の前の不条理に知識人が持つべき「わななくような怒
り」を抑えつつ、リベラル再生の決意を込めて生きていかなばと思う。この本が「リベラル再
生」の議論のたたき台となれば幸いである。

葵子日桂川潤

目次

はじめに

I リベラルの危機と再生

1

リベラルの再生はなるか——真の変革への道筋	3
アベノミクスの本質と日本のイスラエル化	17
——リベラルの危機と再生(その2)	
リベラル再生の主体は誰か	31
——リベラルの危機と再生(その3)	
思考停止の夏と希望への視界	45
——リベラルの危機と再生(その4)	
リベラルなエネルギー戦略の模索	61
——リベラルの危機と再生(その5)	

II 対談編

77

山口二郎×寺島実郎

お任せ主義を超えて、いま「リベラル」

を獲得し直す 79

中島岳志×寺島実郎

二一世紀世界における保守の条件とは

——立ち位置の確認のために 105

III 大震災復興への視座

129

東日本大震災の衝撃を受け止めて

——近代主義者の覚悟 131

震災考——指導者の役割と国際関係

..... 139

大震災復興への視座——柔らかな構想力を求めて

..... 147

いま原子力をどう位置づけるのか

..... 155

——より国家が責任を持つ体制を求めて

戦後日本と原子力——今、重い選択の時

..... 163

二〇一二年夏の空気

——健全なる経済主義の忘却 175

IV 世界認識の鮮明なる転換

米主力部隊のイラク撤退	185
——「覇権なき中東」の序幕	
オバマ政権の苦闘——二〇一〇米中間選挙の意味	193
二〇一一年の意味——世界の構造転換と内なる成熟	201
ウィキリークスの衝撃	209
——政権交代後の日米関係の結末	
9・11から一〇年——迫る日本外交の転換点	217
二〇一一年秋の世界潮流	227
——縮む米国と欧州金融危機、そしてシェールガス革命	
世界認識の鮮明なる転換——二〇一二年日本の覚悟	235
マッカーサー再考への旅	247
——呪縛とトラウマからの脱却	
尖閣問題への新たな視角——大中華圏の政治化	257
二〇一三年の主題としての米中関係、 そしてウェッブ上院議員との面談	265

I リベラルの危機と再生

リベラルの再生はなるか

——真の変革への道筋——

ここで「リベラルの再生」とは民主党の復権を意味しない。なぜならば、民主党のリーダーの多くの自己認識は「保守」であり、政権に就いていた三年余において、この政党は「消費税の増税」と「対米萎縮外交」を政策軸とする「第二保守党」と化し、変革への意思を霧消させてしまったからである。

原点に還り真の変革の基軸について再考せねばならない。忘れ難い光景がある。○九年政権交代の一年半後、既に民主党政権の迷走が顕著であった。西日本の労働組合運動の大会に呼ばれ話をした翌朝特急に乗ると、前夜熱い議論をした若者たちがおにぎりを届けにきてくれた。動き出した汽車の窓の向こうで叫ぶ声が聞こえた。「先生、政権交代って何だったんですか。本当の変革って何ですか」。リベラルの担い手たるべき労働組合・市民運動も、組織維持のための建前と小成に安んじ、下支えする者の真剣な問いに答えてはいない。

政治状況認識——そしてリベラルは消失した

二〇一二年末総選挙の結果をどう捉えるか。突き詰めれば民主党への深い失望と第三極なるもののための思いが、相対的に自民党を浮上させた構図といえる。それは、一割もの投票率の低下（前回六九・三％、今回五九・三％）と自民党得票数の二一九万票もの減少（比例得票、前回一八八一万票、今回一六六・二万票）が象徴している。つまり消極的な支持が小選挙区制の魔術もあって自民党大勝をもたらしたのである。

民主党への失望とは何か。それは、政策基軸の迷走に尽きる。同じく〇九年に政権交代した米国の民主党オバマ政権と対比すれば、日本の民主党の罪深さが分かる。少なくとも、オバマ政権は掲げた政策をやり抜こうとした。「イラクからの撤退」「強欲なウォール街を縛る金融規制法の実現」「医療保険制度の拡充」など、厳しい評価もあるが政策目標に挑戦し続けた。一方日本の民主党は、「マニフェスト」に掲げたことを放棄して、「政治的現実主義」の名の下に妥協と変節を繰り返し、自民党が主張していた政策に引き寄せられていった。それは世界観の欠落と政策基軸への使命感の喪失による。

世界史の潮流が冷戦後二〇年を経て、各民族・国家が自己主張する「全員参加型秩序」に向かう中で、冷戦期の外交の枠組みを見直し、米軍基地や日米同盟を二一世紀にふさわしく再設計すべきだったにもかかわらず、「今までのままでいい」という惰性と思惑停止に後退してしまった。

「消費税の増税」も、それまで財政秩序を強い問題意識としてきたならばともかく、突如「最優先の政治課題」として、党内の仲間を切り捨て野党と手を組んでまで実現を図ろうとする豹変ぶりであった。3・11を経て重要課題となった原子力についても、「脱原発」を掲げる一方でその実現には避けられないはずの「日米原子力協定」の見直しに向かうわけでもなく、日米で共同して外国に原子炉を売り込む政策を推進するという矛盾から出ようとしなかった。あらゆる意味で、民主党は変革の筋道を喪失したわけで、存在意義を自ら否定したのである。

一方、民主党迷走の中で一時は「維新の会に日本の未来を託せ」といわんばかりの追い風を受けていた第三極も、国民意識に「躊躇と疑念」が生じて失速した。本来「大阪都構想」を掲げて地方分権を目指す改革勢力だったが、「国権の下方」(中央集権を否定するリベラリズム)を志向する軸を失い、国家としての自己主張をことさらに強調する国家主義勢力との連携・統合を図ったことで方向感が見えなくなり、限られた支持しか得られなくなったのである。

自民党への相対的支持をもたらしたのは「景気回復願望」であった。各種出口調査での「投票を決めた理由」をみると、「景気回復・経済再生」が国民の願望であったのが分かる。わずか一年前、「脱原発」といって、「戦後経済成長路線への反省」を語っていた空気は一変した。安倍政権がスタートして調整インフレ論ともいえる「金融緩和と財政出動」に動き、株が上がり、為替が円安に動く、「現代のええじゃないか運動」ともいえるほど、思考停止の「景気回復ええじゃないか」ムードに酔いしれる有様となった。あっけないまでの経済主義への回帰である。二〇